籠の中の小鳥は籠にいることを望んだ

リード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

籠の中の小鳥は籠にいることを望んだ

【Ｎコード】

Ｎ４２３４Ｐ

【作者名】

リード

【あらすじ】

籠の中の小鳥が籠の中にいることを望んだ話。

全てが仄暗く主人公達も若干病んでいる愛の話。

（前書き）

一組の男女が選んだ選択の物語。

仄暗い。けど、純愛。

真っ直ぐすぎて若干歪んで見える。

では、どうぞ！！

天井にほど近いガラスの天窓からは、綺麗な夕闇の空が見える。
私は、それを柔らかく白い寝具に覆われた寝台に腰掛けて眺めていた。
空にほど近いこの塔から見る景色はすばらしいの一言に尽きる。
足をパタンと動かすと私の足首にはめられた繊細だが頑丈な作りの銀の枷が、シャランと涼やかな音を立てた。
（こんなの付けなくても逃げないのに・・・）
そんな事を考えながらも天窓から空を眺めることはやめなかった。
日が落ちる。
月が昇る。
夜が、来る。
部屋の隅にある魔法陣が淡い青い光を発し始めた。
――――――――――――――彼が、来る。
一瞬、部屋が日中の様に明るくなり、思わず目をつぶる。
光が消えて目を開くとそこには、藍の髪に青銀を瞳に宿し、莫大な

魔力を身にまとった彼がいた。

「――――“　　”」

名前を囁かれて、痛いくらいに抱きしめられた。
彼が身につけている冷たい雪の様な香りが私達を包む。

彼は、繰り返し、私がここに存在(いる)のを確認するかのように私の名前を囁き続けた。
１０分ほど抱きしめ名前を囁いた後、大分満足したのか、私から離れた。

彼は、私を愛してる。
それと同じように私も彼を愛してる。

思わず、顔がほころんで笑顔が零れ落ちた。
だって、“　　”が傍にいてくれる。

彼もいつも怜悧な美貌が、僅かに緩み淡い微笑を浮かべている。

「“　　”、お前の事を俺から奪い取ろうと各国の中から軍隊が派遣される」

魔王から聖女を奪還するんだとよ、と心底愉快そうに嗤う。
内心は、はらわたが煮えくりそうになっていることだって知っている。

だって、幼なじみだから。
――――――なによりも、誰よりも、世界よりも大切な、君だから。

「昔から、“　　”は俺のモノなのにな」

そう、私の全ては君のモノなのだ。
君を映す瞳や、君に愛を謳う為の唇は言うまでにあらず。
髪の一筋、血の一滴にいたるまで、私は君のモノだ。

「取り返すも何もない。ただ、君の傍らにあることを望むだけだ」

そう言うと彼は愉快そうに笑い。
だが、笑った後、不機嫌そうに呟いた。

「――――――――――予言に詠まれてお前に能力(ちから)があるからって奪い取っておきながら。俺がお前を取り戻したら、軍を差し向けるんだと」

そう嗤って、また私を抱きしめた。
硝子細工でできた花を触るように優しく。
上から降ってくる愛のつぶてと言葉を受けながら、私も彼の背に腕をまわした。

小鳥(聖女)がいることを望んだのは鳥籠(魔王の傍ら)の中

（聖女は人間で、魔王も人間だということ）

（後書き）

いつかは書いてみたいオリジナルな話。
若干歪んでいる主人公達の純愛の話です。

私はなにかヤンデレの意味を間違えているような気がする・・・

誤字脱字などありましたら報告お願いします。
読んでくださってありがとうございます！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4234p/

籠の中の小鳥は籠にいることを望んだ

2011年1月16日08時15分発行